

和井田 清司 ほか 編著

『中等社会科 100 テーマー<地理総合・歴史総合・公共>授業づくりの手引きー』

丹 治 達 義*

2020年、いよいよ小学校で本格実施が始まる新学習指導要領は、中等社会科にとっても大きな変革をもたらす。本研究会でも研究テーマとして繰り返し扱われてきたが、それは高等学校の新必修科目である地理歴史科「地理総合」「歴史総合」、および公民科新必修科目「公共」の設置である。これから実際に各科目の教科書が出版・採択され使用されることになるが、現時点では具体的にどのような内容を指導し、また教材とすればよいかは多くの現場教員の関心の集まるどころだろう。またこの三つの科目が必修科目になることによって、一人一人の地歴科・公民科教員が自身の専門以外の科目を担当することになる機会も当然増えるだろう。特にその「専門以外の」科目についての指導準備に関しては、日々の授業や校務、また生徒指導に忙殺され、教材研究の時間を十分確保できない現場教員にとっては、悩みの種といえるかもしれない。

また最近では教科指導に当たる教員の立場も多様化している。例えば学校再編によって、公立・私立を問わず中高一貫校が増加し、中等社会科の一体化が図られる現象がみられる。その中でこれまで高校の地歴科・公民科として指導に当たってきた教員が、中学校社会科も含めて担当する機会も増えている。

評者は特別支援学校（視覚障害）で中学生に社会科、および高校生に地歴科・公民科を指導している。特別支援教育の中でも必要な生徒に対しての教科指導は当然行われているが、特別支援学校の人事異動の中で、それまで知的障害のある生徒の担当となり教科指導を担当してこなかった教員が、翌年、別の特別支援学校高等部の地歴科・公民科の担当になることも珍しくない。この場合にも教科指導の専門性を担保しなくてはならず、現場の教員が苦勞している例をよく聞く。

そのようなことを踏まえると、現場教員のことを考えてこれら三科目を指導する際、教科書以外の資料としてまず必要となるのは、高等学校地歴科・公民科の基本的な構造や学習内容に関する体系的な情報や、具体的に取り上げる教材をどう調べていけばよいかという情報である。

本書はそういった声に応えるべく発刊された、大変内容の濃い書籍である。中等社会科に関する100のテーマについて、以下の章立てで整理され、章ごとに見開き2ページで1テーマが設定されている。章の中

にあるテーマ数を（ ）で章名のあとに示す。

第1章 中等社会科のあゆみと課題	(3)
第2章 中等社会科の授業作り	(12)
第3章 「地理総合」実践の手引き	(20)
第4章 「歴史総合」実践の手引き	(35)
第5章 「公共」実践の手引き	(25)
資料・付録	

第1章では、初期社会科からの社会科教育のあゆみを中等社会科を軸に振り返りながら整理している。3テーマで網羅するには膨大な内容であるが、コンパクトにまとめることが重視されており、評者のように一度学んだ者であっても、じっくり読むと改めて初期社会科からの体系的な理解をとらえ直すことができ、学ぶ内容が多いと感じた。

第2章では、実際の授業を作るにあたって、その理論と実践をテーマごとに整理している。学習指導案、教材研究、教科書、調査・発表学習、実物教材・映像教材、ICT活用など、多くの今日的課題と実践方法について言及がなされ、評者自身の実践の振り返りとなった。

第3章から第5章では、「地理総合」「歴史総合」「公共」のそれぞれの実践に向けた手引きが掲載されている。冒頭に各科目を学ぶ意義や目的があり、その後学習指導要領の当該科目の「内容とその取扱い」の大項目に即してテーマが設定されている。内容も学習指導要領に即しているが、一方で現時点のように教科書がない段階でも、各科目で学ぶべき内容は何か整理され、またどのような資料で学びを深めればよいかという文献資料の紹介もあり、すべてのテーマが大変わかりやすくまとめられている。

本書は、中等社会科の立ち位置を理解し、またどう実践すればよいかという点での基本書と言える。使用場面としては、大学での教科指導法の授業における使用や、教育実習時の基本テキスト、また高校初任者や、中堅・ベテランでも専門以外の初担当科目の指導準備として活用できる可能性が高く、中等社会科教育を学ぶ人、またそれに携わる人が幅広く読者の対象になるといえよう。

最後に一点、本書の今後に向けての希望を述べたい。本書のようなテキストは発刊されると長く使用されるが、実際の中等社会科の教材はいわば「水物」であ

*筑波大学附属視覚特別支援学校

る。激動するグローバル社会の中で、最新といえども、短時間で情報がアップデートされてしまう。もちろんその中で普遍的かつ本質的な情報が多くあることは踏まえた上で、本書の内容も定期的にアップデートしていくことが必要であろう。例えば教科書の小改訂

とともに改訂版を発行したり、書籍を電子化して、最新情報を紐付けできるなどが考えられるだろう。これだけの内容を整理して発刊したことは大変貴重であるので、時代の変化に即応できるような中等社会科の全体を知る「基準テキスト」であり続けてほしい。

(三恵社, 2019年8月刊, 255ページ, 2,000円+税)